

長岡市立科学博物館 令和3年度 児童・生徒「昆虫標本展」

審査講評

審査長 越佐昆虫同好会会長 中野 潔
越佐昆虫同好会会員 榎並 晃
胎内昆虫の家 館長 遠藤 正浩

十日町市立里山科学館 越後松之山「森の学校」キョロロ 学芸員 加藤 大智

1 出品状況など

今年の出品数は、小学校 50 点、中学校 4 点、計 54 点と昨年より 15 点多く、近年になく多数となりました。特に小千谷市立南小学校は、学校全体で昆虫採集・標本作成に取り組み 24 点の出品をいただきました。また出品増加の要因として、昨年からのレポートの提出の義務付けを外したため、出品のハードルが下がったことが挙げられます。はじめての出品には、特に有効と思います。一方、レポートを書くことにより、より昆虫についての理解が深まり、科学的見方をする実力が付く面もあり、学年が進んだら、または 2 回目からの出品には、ぜひレポート作成の取り組みが望まれます。

なお、出品は中越地域はもとより、広く魚沼、上越、佐渡各地域からもありましたが、下越地方からの出品はなく、地域的にはやや偏った傾向となりました。今後は、さらに県全体に出品が広がっていけばと期待します。

今年は、昆虫の中では、特にトンボの出品が多く見られました。トンボは昼間に楽しく採集でき、標本づくりも比較的簡易なため良い題材とされます。ぜひこれをきっかけに、より深くトンボを極めたり、他の虫に興味を持ったりして発展していただきたいと思います。

生物多様性の大切さが社会全体で注目されるいま、昆虫を採集し標本にすることはまさにその基礎的情報の収集という意義があり、重要性が高まっています。一般市民にこうした活動が正しく評価され、理解を深めてもらうためにも、この標本展が継続的に行われることが大切と思います。

2 標本づくり、標本管理について

今年はあらかじめ出品の手引きに、作品作りのポイントとして、標本箱、針の刺し方、ラベルの付け方を細かく示してありました。また、昨年の出品者には、その場で個別に、より良い標本づくりを指導してきました。

その結果、出品作品はよく整理されていました。したがって、出来栄はかなりレベルの高いものが多かったと思います。特にチョウの展翅（てんし）は、丁寧にやるよう努力している人は、飛躍的に上達しています。

ラベルの全く付いていないものは、ありませんでしたが、中にはデータラベルが標本の針に正しく付いていない、採集地名がただ「裏庭」、「〇〇公園」など自分しかわからない書き

方になっている、市町村名だけで集落名等の具体的表記がない、採集日は西暦にすべきなのが「令和」になっている、などの残念な例が見られました。データラベルは、後にだれが見ても正確な情報が伝わるように記載するよう心がけましょう。

昆虫の種名は、まずできるだけ自分で調べるようにしましょう。わからないときは、すぐに種名を聞くのではなく、調べ方、例えばどの図鑑をどのように見ればいいのか、どの部分が見分けるポイントなのかを聞いて自分で調べるとグングン実力が付きます。指導者の方々も心掛けていたかとよいと思います。また、図鑑やインターネットで似たものを絵合わせだけで名前を付けるのではなく、その種の解説、特に似た種との見分け方、発生時期、分布などを必ず読み、その内容とズレていないことを確認するようにしましょう。特に小さな虫では、どうしても名前がわからないという場合もありますが、その場合は無理せず「○○科の一種」「□□の仲間」など、わかったグループ名まで書くことでも良いと思います。

昆虫標本は、大切に保管すべきものです。せっかくの標本が、標本を食う虫（ヒメマルカツオブシムシなど）に食われているものが見受けられました。防虫剤を切らさないように管理しましょう。

展示用の箱は、自作のものも含め工夫が見られました。ただ、多くの貴重な標本を保存する場合は、やはり市販のドイツ型標本箱を使用すべきでしょう。かなり高額ですが、気密性が高く、虫やカビから標本を守ることができ、標本が貴重であることを考えれば、そのお金を出す価値は十分にあります。標本箱に標本が増えていくことは、うれしいことです。またその標本を並べてみると新たな発見や、テーマが見つかることと思います。

3 印象に残った作品など

出品数が増加したこともあり、今年は全体的に作品のレベルが高まり、競争率が高くなりました。そのため、昨年出品し受賞し、今年も継続的に活動を続け出品した人で確実にレベルアップが見られている場合でも、必ずしも上のレベルの受賞とならない結果でした。

最初は、見つけた虫を採集し集めるだけでも良いのですが、興味が深まってきたら、特定のグループの虫に絞って、または特定の環境に絞って、いろいろな方法で採集するなどテーマを持って採集し、まとめることでさらにレベルアップし評価が高くなります。今回金賞を受賞した4作品は、ほぼこのパターンです。

「佐渡のちょう」は昨年にも続きの出品で、2年間の集大成となっています。特に出品種類数が多く、年間をとおしていろいろな場所に出かけ多くの採集を続けられた結果で、また標本作成技術も素晴らしく目を見張るものがあります。また通常のデータラベル、種名ラベルに加えて、展示用にラベルを添付するなど、見やすい展示の工夫も感じられました。

「アリ標本 2021」は、身近な環境にいるアリに着目し、精力的に多種類集め、きちんと同定した結果を上手にまとめています。アリは微小で意外と種類が多く、地味であり興味を持つ人が少ないグループですが、良い図鑑も出ていて、慣れれば同定（種の判別）も可能なので、こういったものは、より成果が出やすく、また出品すると注目度は上がります。

「糞虫が好む場所」「直海浜海岸の昆虫～植物が生えている場所と砂浜での比較～」はいずれも、うまくテーマを絞って、採集を続け、多種類の標本を得て、まとめられていて、興味を持った虫を時間を掛けて調べることでより成果が上がっています。

「十日町市・津南町に生息するトンボ標本」は標本とともに解説文の展示ラベルが標本箱に入れてあり、博物館の展示のように見やすく工夫されていました。標本箱には標本だけでなく、その標本箱を作った目的や制作者の考えが伝わるような展示用のラベル・地図などが入っていると、独創的で分かりやすい作品になります。箱いっぱい標本を詰め込まなくても、アイデア次第で見る人を惹きつけることができます

「セミのう化のかんさつ」は標本数は5個体と少ない作品ですが、羽化途中で力尽きたセミの標本など他にあまりない独特の構成で、羽化の様子を記録したレポートとの対応が素晴らしい作品でした。自分が観察したありのままを記録しようというひたむきな姿勢が感じられます。自然観察において最も大切な視点です。

他方、明確な目的が示されずに同じ種類を多数並べた出品も目立ちました。地域の密度を調べたり、個体変異（同じ種類でも色や形が異なること）を調べるという目的があればそのようにすることもありますが、普通は1種につき1～数頭の標本があれば充分で、ただ採って標本にしたからという理由で多数を並べるのは、好ましい印象が得られません。同種を多数並べる場合は、その意味が分かるようなレポートや展示の仕方が必要です。

昆虫は種類数がとても多く、身近な虫でもまだまだ分かっていないことがたくさんあります。興味を持った昆虫について、観察、採集を続けることは楽しいうえに新たな発見が待っています。今回出品された作品はいずれも、昆虫に対する興味や努力の跡が感じられ、これからの発展が大いに期待されます。

4 注目すべき記録

魚沼市のラミーカミキリは2015年の柏崎市での発見に続き県内2例目の発見になりました。新聞でも取り上げられましたが、このような発見が標本として記録に残ることは大変素晴らしいことです。

虫の発生は年による変動が大きいというえ、温暖化等の影響で、年々変化もしています。こうしたことは、ぜひ記録しておくべきことと思います。

科学博物館 展示会担当より

今年は昨年より大幅に出品数が増加し、賑やかな展示会となりました。入賞のハードルが上がったことで、残念ながら選外となってしまった作品も多くなりました。しかし継続して出品された作品には標本・レポートともに着実なレベルアップが見られ、努力と工夫のあとが感じられました。標本作り・科学研究はともに一朝一夕には形になりにくい地道な活動ですが、みなさんの力は確実に伸びています。来年も多くの作品に会えることを楽しみにしています。